

るが、私は逆に、二年三作は、年二作の不完全形で、その意味で、二毛作の原形と考へる。私は最近要術を検討した結果「二年三作こそ要術の推賞するシステムでなかつたか」という疑を持つ様になつた。がしかし、この問題は中國農業史上の大きな問題であるので、一層自説を検討して稿をあらためて發表したいと思つてゐる。

以上私は失禮を顧みず先學の力作に對して妄言を敢てしたが、繰返すようであるが、譯者長年の勞苦によつて難解な齊民要術は農業知識の少ない私達にもよく理解できるようにした。本書は中國古代史及び社會經濟史家の必携の書と言ふも過言ではない。氏は「要術研究の如き廣汎未開の分野の開拓は、ひろく世間同學の協力に依らねばできないのであり、本書の如きは僅かにその一里塚にすぎない」と謙遜していられるが、それは譯者の學問的良心から出た言葉であつて、要術研究はここに一つの金字塔を樹立されたものと言ふべきであらう。

〔附記〕

文中であれたが、最近中國から、石聲漢氏の「齊民要術近釋」(全四冊、うち二冊一卷より六巻まで既刊)が公刊された。本書の解釋も、不審に感ずる所もあるが、現地人の有利さを發揮した優れた箇所も多い。例えば晴田與晴田皆傷田、二歲不起稼、則一歲休之を「二年つづけて作物の出來がわるいと一年休閑せよ(一八頁)」とするなどは、是非は別として、新しい注意すべき解釋であらう。兩書を併讀することを、おすすしめしたい。

(米田賢次郎)

Rise and Fall of the Mughal Empire

by R. P. Tripathi. Allahabad (Central Book Depot), 1956. A5 IX + 504 pp. index, 4 maps.

インディヤ歴史家によつて最近執筆されたムガル帝國史概説書の一つを紹介する。著者 R. P. Tripathi 氏はブランバール (Allahabad) 大學史學科前主任、現サウガル (Saugar) 大學副總長の地位にある。Some Aspects of Muslim Administration, 1956. の著者を通じてインド・イスラーム時代の研究家として知られてゐる。

ムガル帝國史の概説書としては、既に英國人史家によつて編まれた有名な The Cambridge History of India, vol. IV, The Mughal Period. Cambridge, 1937. の大冊がある。The Cambridge History of India, ed. by H. H. Dodwell. Cambridge 1934. やまた獨立後のインド人の書いたものとして An Advanced History of India, by R. C. Majumdar, H. C. Raychaudhuri & Kalkinkar Datta, 2nd ed. London, 1950. Part II Book II (p. 425ff.) にそれぞれムガル時代史が含まれてゐる。また近く The History and Culture of the Indian People, ed. by R. C. Majumdar & A. D. Pusalker. vol. VII, The Mughal Empire. (現在第IV巻まで出ている。) の出版が豫定されてゐると聞く。本書はこれらのムガル朝史概説書の中でどのような特色を示そうとするのか。著者によれば、「本書のねらいは今一つ別の教本を世に出そうとするのではなく、大ムガル帝國史をそれに興味を抱くあらゆる人々のために最新の研究、調査に照して再説することにある」(Preface p. 1) と。即ち「最新の研究を採入れたことをその特色」と言う。著者は又、「歴史記述の精髓は正確さにある」と言う實證主義的主張から原史料を丹念に精査して可能な限り忠實を

期したことを誇っている。もとよりこのことは歴史研究の常道であるべきことであるが、龐大なこの時代のペルシャ語・トルコ語等で記された原史料を読み抜くにはかなりの苦勞（有利なネイティブの史家にとつても）を必要とすることは明らかで、これには相當の敬意が拂われてよいであらう。

さて、次に内容の概観に移るが、その目的を果すには本書の章分けを眺めるのが最も手取早い道であらう。

Chapt. I Babar ; II The Lodi Empire III ; Humayun ; IV The Second Afghan Empire ; V Sher Shah ; VI Islam Shah ; VII Break-up of the Second Afghan Empire ; VIII Akbar the Great : The Regency ; IX Struggle with the Nobility ; X Conquests of Akbar ; XI Rana Pratap of Mewar ; XII Akbar Consolidates ; XIII Akbar Triumphs ; XIV Extension of the Empire ; XV The Deccan ; XVI Jehangir ; XVII Pacifications ; Frontier Problems ; XIX Rebellions : Shah Jahan : Mahabat Khan ; XVIII Shah Jahan ; XX Second Phase of the Deccan War and After ; XXI The War of Succession.

の二十一章から成つてゐる Babar (1516-1530) に始まりシャー・ジャハーン Shah Jahan (1628-1666) の末年に終るムガル朝前半期の政治史である。取扱わるべき初五代の皇帝、即ちバーバル、フマール・ムーン、アクバル、ジャハーンギール及びシャー・ジャハーン統治期間の中、アクバルの時代に中心を置き、これに全二十一章中八章（頁數にして全五〇四頁中一二七頁）をあてているが、まず順當であらう。第一章では中央アジアのチムール Timur から説起し、バーバルの生立ち、北インド侵入に至るまで、第二章では

當時北インドを領有していたロディー Lodi 帝國との對立抗争、パーニパット Panipat の會戰、ラーナ Rana のインド敎國との對戰、第三章ではバーバルの死後を承けて立つた長子フマール・ムーンの活動、隣邦諸國との角逐、第四章―七章はフマール・ムーンの敗北、第二次アフガン帝國の成立とその崩壞過程、第八―十五章はアクバルの治世。バイラーム・ハーン Bairam Khan との紛争、疆域の擴張、統治機構の諸問題、第一六―一八章はジャハーンギールの治世を、第一九章以下ではシャー・ジャハーンのそれを扱つてゐる。

敘述の態度は表題に示されている通りまことに“Rise and Fall”であつて政治の興亡を述べるに終始し、今日の史學の一般的水準から言つて物足りない感じが強いのは否むべくもないと思う。政治史であつても、社會・經濟・文化の諸相との關連のもとに、また支配者側からだけでなく被支配者側からも眺める工夫がなければ今日の讀者の納得を与えることはむずかしいであらう。しかし、この時代の史料が帝王の傳記を主としてゐるので、勢ひ支配者中心の政治史におち入るのは或程度やむをえないことも知れない。詳細な政治事件の發展經過を知るには從來のどの概説書よりも克明に記されているのでその限りでは便利な書と言ふべきであらう。各章の終には年表と文獻目錄を一應備えているが、もう少し詳しいものにするのが望ましい。Cambridge History of India、や Advanced History of India、と比較してみてもムガル史の高級概説書としての本書がこの點むしろ中途半端な行き方をとつてゐるのは残念である。

本書は鋭い問題意識に乏しく、讀者の期待を裏切るが、ともあれ最近のインド人の書いたムガル史として我々が注意を拂ふ價値ありと考へてあえて紹介を試みた。

（惠谷俊之）